

最近の異常気象によって、水害の発生が世界各地で報告されています。普段あまり感じることはありませんが、水は密度の高い物質で大きな圧力を生み出します。横転した車や抉り取られた橋脚などの映像を目の当たりにすると、水圧の怖さを思い知らされます。水耕稲作を始めた弥生人たちは、栽培に水を利用するために危険が潜む水際や水中での作業もしていくことになりました。川の水を田んぼに引き入れるには、準備した用水路に導入しなければなりません、そのために堰が必要となります。堰が受ける水の圧力は空気より800倍以上も大きく、水流に抗ってする作業にも同じ力がかかります。さらに、堰の構築材には意図したバランスに水圧を分散させる必要があり、また、それを生じさせるタイミングも非常に微妙です。バランスやタイミングを誤ると破壊や事故につながる可能性が高く、人命をも脅かすからです。

したがって、堰などの治水や灌漑などの共同作業には、築造のノウハウが必要で、それを知る者の適切な指揮があつてはじめて可能になると言えます。とすれば、作業者は信頼をおける者にのみ、指揮権を委ねられると言えるでしょう。

弥生時代には、軽微な失敗を繰り返しつつも、治水や灌漑の築造ノウハウを身に着けた者が現れます。彼の子は、父の作業を間近で見て育ち、やがて一緒に作業してノウハウを身に着けます。時には経験したことのない状況を父と供に試行錯誤して、より優れた構築物をつくるノウハウを蓄積します。そんな環境が何代か続くことで、“作業の指揮者”が“全体の統率者”へと成長し、世襲されることで首長層が生み出されたとしたら、説得力があると思えるのです。

レジメに宗像前田遺跡の堰の全景と断面の写眞があります。全景写眞はそれを初めて見る者にはよく分かりません。断面写眞は残っている横板が強調され、幅に対して奥行きが浅く見えることから、上述の妄想をする者には、短期間に一気に作り上げた構築物のように思えたのでしょう。完成時には水流に対する絶妙なバランスと、それでいて作業時には全員のタイミングを一致させなければならない、作るためには非常に多くのノウハウが求められる堰のように見えたのでしょう。

縦杭の多さが強調されなかったのは、前田遺跡の堰がこの時代の一般的なものなのでしょうか。しかし、報告書に同じアングルのモノクロの全景写眞を見つけたとき、そこに判別できた杭の多さに驚きました。三桁を超える縦杭の多さは上述の妄想のイメージとは幾分異なっています。右はその平面図ですが、ここに記されたすべての点が縦杭を示しており、これだけの杭を打ち込むにはそれなりの期間を要したと思われるからです。

周辺地図と照らし合わせて、下方が川上であることも確認できました。右岸から岸に沿うように数列の杭が打ち込まれ、円弧上に中央部に進む

ほど列数が増やされています。これらの杭でその背面領域に水圧の低い作業の足場を確保して、堰を延伸したのでしょうか。中央部にはこれ以上打てないほどの密度で杭が打ち込まれており、この縦杭の密集で水の流れる方向を変えていたのでしょうか。断面写眞は水流の方向が変化する部分に設えた主要部だと思ったのですが、報告書からは平面図のどの方向から撮影されたものか読み取ることができませんでした。

周辺地図から遺跡部分の加茂川が、両側から迫った二つの丘陵に挟まれた狭い低地にあり、その中ほどに遺跡が位置しているのが分かります。つまり、堰を築いて川から導水するほどの大規模な水田を営むような平地が存在しないのです。果たして、これが流れの方向を変える“堰”であるのか分からなくなります。報告書のまとめにも“杭列が築かれた目的及び杭列とその周辺との関連は不明である”と記載されているのです。

一般的には、内部にある集落を防御するためと考えられる環濠も、伯耆やその周辺では、内部に集落の痕跡が確認できない環濠があるようです。古い時代の構築物には解明されていない謎が、まだまだ多いようです。

